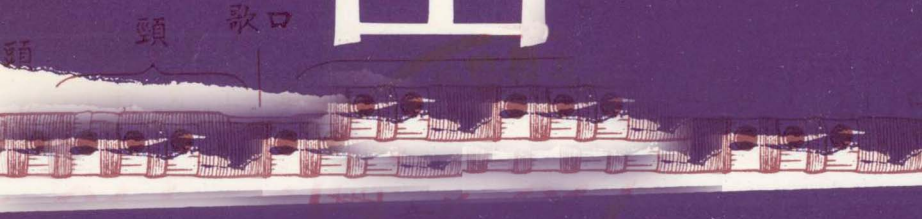
笛師

新田次郎

新田次郎

笛



笛師　八五〇円

第一刷発行　昭和四十五年九月十六日
第十刷発行　昭和五十五年二月二十九日

著者　新田次郎

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号　一一二
電話大代表東京(九四五)一一一一　振替東京八―三九三〇

印刷所　豊国印刷　製本所　大製

© 新田次郎　1970
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

0093-148571-2253（2）　（文2）

笛

師

装幀　山本美智代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

1

京都の夜は底冷えがする。

板の間の仕事場に長いこと坐っていると、寒さは手足の指先から、徐々に責め上げて来て、ついにはこらえられなくなって、坐り直したり、手の指を揉んで見たりする。だが、しばらくすると、前よりも、もっときびしい、背筋をつらぬくような寒さがやって来て、思わず身振いをしてしまうのである。

新之助は上座の方に眼をやった。同じ笛作りの仕事場でも、そこは笛師の座であるから、一段と高くなっていて、畳敷きであるし、大きな火鉢が置いてある。電灯も一段と明るい

し、仕事机も違っていた。中央に坐っている兄の清道はどう見ても寒そうではない。かと云って暖いという顔でもない。彼は、その一段と高い仕事場の置き物のごとく泰然としていた。

「新之助、小刀を研いでくれ」

兄の清道に云われて新之助は、座を立った。兄の仕事台の上には数種類の小刀が置いてある。そのうち、三つばかりを清道は新之助に渡すと、すぐ仕事に取り掛った。清道は竹の皮落しをやっていた。笛の長さに切った材料竹の、皮を剝ぎ落とすという単純な作業だけれど、均等に皮を剝ぎ落とさねばならないから、小刀を二、三度動かすごとに竹の方向をかえ、軸を中心にくるくる廻しながら皮を剝いでいた。

竹は琵琶湖岸の守山、安土、米原あたりの農家の竈の上に並べて使ってある、シノベ（篠竹）の古いものを探し出して来たものである。大体百五十年ほど経ったものがもっともよかった。二百年以上経ったものは笛にするには脆弱過ぎたし、年代の経っていないものは癖が多過ぎた。

その材料のシノベの買出しは新之助の仕事であった。琵琶湖附近の農家で、家を建て直すという話を聞くと、出掛けて行って、使えそうな竹を分けて貰って来るのである。

「この竹は少し古すぎるぞ、何処で買って来たのだ」

清道は小刀を動かす手を休めて新之助に訊いた。
「安土の近くの上出という村です」
「ただ、古い竹ならなんでも笛に使えると考えたら見当違いだ。その家が何年経ったかよく聞いた上で、買う前に竹を折って見るのだ、折って見れば年代は大体わかる」
「はい……」
「新之助、竹探しを始めてから何年になる」
「もうかれこれ十五年」
「十五年——かかっても、竹一つ探せないようでは、笛師の小廻りができるとは云えないな」
新之助は黙ってぺこりと一つ頭を下げた。兄の飛田清道は笛師であり、弟の飛田新之助は笛師の小廻りである。新之助は材料集めのような仕事のほかに、仕事場で手にする笛は、一本二円か三円のお祭り用の笛であった。新之助が作り得る笛はその安物の笛までで、飛田家に代々伝わっている、高麗笛、竜笛、神楽笛、篳篥など、雅楽の笛には手を触れることさえ許されていなかった。
雅楽家の系図が天皇家よりも正確だと云われているのに対して、笛師の系図はほとんど残

ってはいなかった。飛田家においても、遠い遠い先祖が粟田真人で、遣唐使として唐の国へ行った帰りに雅楽の笛と共にその製法を持って来たという云い伝え以外に笛師の家系だということを証明するものはなかった。

粟田真人がどのような人物で、その後なにをしたか、また何時の時代に粟田が飛田になったのかも分ってはいなかった。天平時代のことはあまりにも遠きに過ぎた。だが飛田家にとっては代々笛を作っているから笛師であり、その先祖が粟田真人であるというだけで、途中になんという笛師が出たかということはたいして問題ではなかった。飛田家の家系ではっきり分っているのは、飛田清和の時代からであった。清和の子清高の事蹟はかなりはっきりしていた。清高は伶人長（雅楽長）東儀頼玄の笛を作ったことがあった。

雅楽は本来宮廷の音楽であり、庶民のものではなかった。雅楽が一般に知られるようになったのは、明治の初年に太政官令によって、民間人が雅楽を奏することを許された以後であった。

雅楽が大衆のものとなったと云っても、この音楽はあまりにも古典に過ぎたためと、それを習得することがむずかしいために、にわかに世間一般に流布されて行くというものではなかった。それでも僅かずつではあったが、雅楽は民間に伝わって行き、楽器の製造数も増加

して行った。雅楽の管楽器を作る家は飛田家を含めて三家あった。

飛田清高は、孫の清澄に家督を譲り、更にその長男清道に笛師の技術は引き継がれたのである。

長男が家業を継ぐというのは、笛師の世界だけのことではなかった。飛田家には笛作りの分家はなかった。

清道と新之助はそういう環境の下に育った。清道は家業を継ぐものとして大事にされた。清道と新之助がまだ幼いころ、父につれられて清水寺へ参詣に行ったことがあった。新之助が誤って、高い石段からころげ落ちた。それを見て兄の清道が走りおりようとしたら父が引き止めて云った。

「新之助は怪我をしてもいいが、お前は飛田家の後継ぎだ、もしものことがあってはいけない、走りおりるではないぞ」

新之助は、父がそう云っているのを石段の下で聞いていた。長男と次男の差はそういうものだと思った。次男に生まれたことが不幸だと思った。

「新之助、なにを考えているのだ、刃物を研ぐときには無心でないといけない、つまらぬことを考えていると、それがそのまま研ぎ上りにきいて来る」

清道が云った。

新之助の頭から思い出が消えた。新之助は研ぎ上った小刀を兄の清道のところへ持って行った。

「兄さん、……」

と新之助が云った。新之助はそのとき、重大な決意を兄に洩らそうとしていた。

「なんだ、新之助」

「私のところにも子供が生れました」

「知っているよ、お祝いもちゃんとやった筈だ、子供が生れたから、笛師として独立したいとでも云うのか、まさかそんなことを云うほどお前は莫迦ではあるまいな」

実は、新之助はそれを云いたかったのだ。雅楽の笛の需要は特に増えないけれど、お祭り用の笛の注文が、大正から昭和に年号が変ると急に増加した。だから、お祭り用の笛だけでいいから、やらせて欲しいと云いたかった。が、兄の清道にぴしゃりと云われると、後が云えなかった。

「新之助、笛の飛田は代々一家に決まっている。どの笛師の家もそうだ。笛師はこのおれだ。お前は、笛師の小廻りもしくは下廻りだ、下請けをやりたいと云っても、下請けに出す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほどの仕事はない」

仕事はあるのだ。あっても下請けに出したくないのは、笛師という看板を飛田新之助に揚げさせたくないからである。

「下請けっていうことでなくても、いいんです……」

収入を増して欲しいと云いたいのだが、新之助はそれを口に出せなかった。

新之助は兄清道の純収入が月四百円を下らないことを知っていた。それに対して、新之助の月六十円の月給はあまりに少な過ぎた。

「月給が安いというなら何時でも出て行ってくれ、お前がやるくらいの仕事をする人ならいくらでもいるからな」

新之助はそれ以上云えなかった。

新之助の父は、兄の清道にだけ、笛の作り方を教えた。笛の稽古にも通わせた。笛作りの名人にするためであった。だが、新之助は、学校を卒業すると、すぐ仏具屋へ丁稚奉公に出された。新之助はその仕事はつらいとは思わなかったが、好きにはなれなかった。新之助は笛師になりたかった。兄がいるから笛師にはなれないのだが、笛を作る人になりたかった。新之助は仏具屋を飛び出した。

「そんなに笛を作りたいなら、下廻りでもやるがいい」
父は新之助に仕事場へ入ることを許したが、父や兄の清道のいる上座には一歩も立入ることはできなかった。笛を作ることと同じくらいに笛を吹きたかったが、もし笛を一度でも吹いたら、この家を追出すと父に云われるとそれもできなかった。その父が死んで、十年になっていた。
新之助は元の座に戻った。そして、彼は獲物にとびかかるような眼つきで、お祭り用の笛作りにかかった。お祭り用の笛であっても笛にはかわりがなかった。とにかく笛の恰好をしていた。雅楽で使う笛と違うところは材料と手数の問題だった。
新之助の前で、笛の穴刳りをしている下働きの源助老人が云った。
「新さん、がまんするさ、笛にかたちがあるように、笛の世界にもかたちがあるのだ。私の親父は先々代の下職で、この俺は先代と今の旦那の下職だ、一度だって、それが不平だなんて云ったためしはない」
源助老人が云ったかたちということばが、新之助の心を打った。

2

日華事変が起り、戦争は際限もなく拡大していき、すべての産業が戦争と何等かの関連を持たないと生きて行けないようになった。雅楽はこの戦争の中で、衰微を見せるどころか、かえって盛んになっていった。宮内省の楽人の定員は増加し、各神社における戦勝祈願のための雅楽の演奏は多くなった。

笙、篳篥、竜笛、高麗笛、神楽笛などの雅楽の管楽器の製造も多くなった。飛田清道は多忙であった。下職は、新之助、源助の他に利吉が加わった。利吉はもともと飾り職人であったが、転業を余儀なくされたのである。需要が多くなり、しかも、何月何日までというように期限を決められると、ある程度分業しないと間に合わなくなった。

いままで、雅楽用の笛はすべて、清道自身が作っていたのだが、そうはできなくなった。竹の皮剝ぎ、穴あけ、谷くり、地塗り、漆塗り、樺巻き等の仕事は、下職がやった。だが、もっとも重要な音律の調整は、清道が一段高いところでやった。同じ寸法で作った笛でも、最後の段階になって、穴の内側をけずって音律の調整を取らねば楽器にはならなかった。

清道は吹いて見ながらこの音律の調整をやった。

新之助は事実上兄の笛師清道と同等以上の技術に達していた。だが、最後の音律を調整する仕事ができないがために、新之助は、いつまで経っても下働きに過ぎなかった。

「新さんが本気になって作れば、まず日本一の名笛ができるだろうな」

源助老人は半ばなぐさめ顔に新之助に云ったが、新之助には、それさえ、一種の揶揄にしか取れなかった。

新之助は黙々として笛を作った。どの部分を作らせても新之助は上手だったが、笛の頭の飾りを彫るのは特に勝れていた。笛はすべて一定のかたちを踏襲するものであった。新しいかたちを作ることは許されなかった。その中で例外としてこの頭の飾りがあった。

笛の頭の装飾は専門語で、蟬と云った。自然の竹の節の模様を生かして使うと蟬が止ったように見えるからであった。新之助は、自然の蟬に彼独特の工夫を加えた。彫りこんで、入念に磨き上げると、新之助の蟬はそれまでの蟬ではなく、雲のような模様になった。雅楽の研究家の第一人者と云われている東京の忍野良策がこの模様に眼をつけた。忍野はもともと洋楽器の研究家であった。楽器の研究については、内外に名を知られていた。

「飛竜模様の頭のついた飛田の横笛は、古典楽器を正しく伝承するという仕事の中に現代を盛りこんだ唯一の傑作である」

と讃めた。飛田の笛の価値は高まった。が、そのことがあってから、清道は新之助に対して、不機嫌な態度を示すようになった。

或る日、清道は新之助を呼んで云った。

「明日から、もう来ないでいい、戦争が激しくなるにつれて、笛の需要は減っていく、人手はこれ以上要らないから、お前は他に仕事を探してくれ」

それはあまりにも一方的な云い分であった。

「そんなことを云ったっていまさら……」

新之助には十四歳の長男浩一郎を頭に次男の隆雄十歳、長女雪子三歳があった。この仕事を止めたらその日から家族は飢えることになる。

新之助は泣いて頼んだが、清道は考え直そうとはしなかった。新之助が、笛の頭の飾りのことを云うと、

「頭の飾りは下職のお前に任せて置いたのだから、どんなものを作ろうが勝手だ。気に入らなかったら、この俺が作り直せと云った筈だ、笛となって出た以上、あの飾りは、笛師飛田清道の作ということになるのだ、お前の知ったことではない」

新之助が失業したのは昭和十四年の春であった。働き盛りの四十四歳であった。子供のこ

ろから笛だけに三十年生き続けて来た新之助にとって、この失業は痛かった。にわかに別な職を求めようとしても無理であった。

新之助の家は困窮のどん底に落ちた。明日の米を買う金がないほどになると新之助は兄の家へ訪ねて行った。笛の仕事はくれず、庭の手入れだとか、垣根の直しだとか、使い走りのようなことをさせた。

飛田清道の住宅と仕事場は渡り廊下でつながっていた。客が来ると清道は紋つき袴に着がえ、頭髪をきれいに分けて、白足袋に扇子を持って、廊下を摺足で客間へ入っていった。客間は庭のよく見える十畳間であった。清道は客の前で頭を下げた。下げるというよりも畳にこすりつけるというような慇懃（いんぎん）な態度であった。客に対しては誰にも、そうであった。謙虚で、にこやかに口をきいた。清道も新之助も母に似て端麗な容貌をしていた。役者のような顔と云った方が適当であった。清道のことを悪く云う人は一人も居なかった。なにごとも控え目にして相手を立てた。彼の態度が卑屈なほど丁寧かというと必ずしもそうではなかった。笛のことになると、姿勢を正して、膝に手を置いて堂々と発言した。気品さえ感じられた。新之助は垣根の修理をしながら、その晴れやかな兄を見て、涙を流した。当時清道の収入は月六百円を越えていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com